

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

ラトヴィア語における否定、形容詞と連体修飾複文
Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Latvian

堀口 大樹
Daiki Horiguchi

岩手大学
Iwate University

要旨:本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するラトヴィア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Latvian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of ‘negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification’.

キーワード:ラトヴィア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

Keywords: Latvian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

1. はじめに

以下、調査項目を大きく否定と連体修飾に分け、アンケート項目の例文のラトヴィア語訳を示し、適宜コメントを加える。なお、ラトヴィア語訳は本論文の筆者が行い、ラトヴィア人のコンサルタント(リーガ出身・在住、女性、30代)にチェックをしていただいた。なおグロスについては便宜上、男性・女性といった文法性の表示は省略し、名詞と形容詞の単数・複数の表示は英語による翻訳で示した。

2. 否定

1. これは私の本ではない。[名詞述語文/コピュラ文の否定]

Šī nav mana grāmata.

this.NOM be.PRS.3.NEG my.NOM book.NOM

be動詞に相当する動詞 būt の3人称現在形 ir の否定形 nav を用いる。なおラトヴィア語での動詞の3人称では、単数と複数の区別がなく同形となる。

2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]

Šajā istabā nav krēsla.

this.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG chair.GEN

存在文の否定では、主語が属格で表示される。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]

Šajā istabā nav neviena krēsla.
this.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG any.GEN chair.GEN

存在文の否定では主語が属格で表示される。否定代名詞の *neviens* 「一つの／誰 (…もない)」を用いて、全否定を表す。

4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]

Tajā istabā nav neviena.
that.LOC room.LOC be.PRS.3.NEG no.one.GEN

存在文の否定で、否定代名詞の *neviens* 「誰／一つの (も…でない)」の属格を用いて、全否定を表す。

5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]

Tā grāmata nav šajā istabā.
that.NOM book.NOM be.PRS.3.NEG this.LOC room.LOC

所在文の否定は、動詞 (be 動詞 *būt* の 3 人称現在形 *ir*) を否定形 *nav* にするのみである。

6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]

Šis suns nav liels.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3.NEG big.NOM

形容詞文の否定は、動詞 (be 動詞 *būt* の 3 人称現在形 *ir*) を否定形 *nav* にするのみである。

7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]

Šis suns nav tik liels.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3.NEG so big.NOM

be 動詞を否定形にし、副詞 *tik* 「あまりに」を用いて部分否定を表す。

8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]

Šis suns ir lielāks nekā tas.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP than that.NOM
Šis suns ir lielāks par to.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP than that.ACC

形容詞 *liels* の比較級 *lielāks* を用いる。比較対象には接続詞 *nekā* または前置詞 *par* を用いる。接続詞 *nekā* と前置詞 *par* に意味上の使い分けは見られない。

9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]

Šis suns ir vislielākais no tiem suņiem.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.SUPER from those.DAT dogs.DAT
Šis suns ir lielākais no tiem suņiem.
this.NOM dog.NOM be.PRS.3 big.COMP.DEF from those.DAT dogs.DAT

形容詞 *liels* 「大きい」の最上級 *vislielākais* を用いる。また比較級 *lielāks* を限定形にした *lielākais* も最上級の意味を持つ。両者に意味上の使い分けは見られない。また *lielākais* の前に代名詞 *pats* 「自身、自体」をつけて、最上級の意味を強調することもある。比較の範囲は前置詞 *no* 「…から」や前置詞 *starp* 「…の間

で], または名詞の属格+vidū (名詞 vidus 「間」の単数位格) を用いる.

10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]

Šodien tas cilvēks neatnāk.
today that.NOM man.NOM come.PRS.3.NEG
動詞の否定形は否定辞 ne-を動詞に付加して作る.

11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]

Tas cilvēks nepaņēma to grāmatu.
that.NOM man.NOM take.out.PST.3 that.ACC book.ACC

動詞の否定形は否定辞 ne-を動詞に付加して作る. ラトヴィア語と同系統のリトアニア語では他動詞文の対格補語が否定になると, 属格補語になるが, 現代ラトヴィア語では否定文でも対格補語が一般的である.

12. 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]

Visi studenti nepiedalījās.
all.NOM students.NOM participate.PST.3.NEG
代名詞 visi 「すべての」を用い, 動詞を否定形にする.

13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]

Ne visi studenti piedalījās.
not all.NOM students.NOM participate.PST.3
否定詞の ne を代名詞 visi 「すべての」の前に置き, 動詞は否定形にしない.

14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]

Tas nenozīmē, ka cena ir dārga.
it.NOM mean.PRS.3.NEG CONJN price.NOM be.PRS.3 expensive.NOM

前の状況を受けた代名詞 tas 「それ」と動詞 nozīmēt 「意味する」の否定形を用い, 接続詞 ka で従属文を続ける.

15. 走るな! [禁止]

Neskrien!
run.IMP.2.SG.NEG
Neskriet!
run.INF.NEG

動詞 skriet 「走る」の命令法 2 人称単数形 skrien に否定辞 ne. を加え, 禁止を表す. または, 動詞不定形だけで命令や (否定辞を伴って) 禁止の意味を表すことができる. 命令法に比べて断固とした響きを持つ.

16. 大きな声を出すな! [他動詞文の禁止]

Nerunā skaļi.
speak.IMP.2.SG.NEG loudly

Nerunā skaļā balsī.
speak.IMP.2.SG.NEG loud.LOC voice.LOC

動詞 runāt「話す」の命令法 2 人称単数形の否定で禁止を表す。副詞 skaļi「(声が) 大きく」または位格の名詞句 skaļā balsī「大きな声で」を用いるのが一般的で、他動詞文にはならない。

17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]

Es domāju, ka rīt nelīs.
I.NOM think.PRS.1.SG CONJN tomorrow rain.FUT.3.NEG

Es domāju, ka rīt nebūs lietus.
I.NOM think.PRS.1.SG CONJN tomorrow be.FUT.3.NEG rain.GEN

動詞 domāt「思う、考える」と従属接続詞 ka を用いる。動詞 līt「(雨が) 降る」の未来形の否定、または be 動詞の未来形の否定を用いる。後者は存在文の否定なので、名詞 lietus「雨」は否定属格 lietus (単数主格と同形) となる。

18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]

Runā klusi, lai tas cilvēks nedzirdētu.
speak.IMP.2.SG quietly CONJN that.NOM man.NOM hear.SBJV.NEG

目的節を導く願望の接続詞 lai を用いる。目的節では接続法(ラトヴィア語学では願望法 vēlējuma izteiksme と呼ばれる)を用い、動詞は否定形となる。

19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]

Es neteicu tā, lai jūs aizvainotu.
I.NOM say.PST.1.SG.NEG so CONJN you.ACC offend.SBJV

主節の動詞を否定形にし、「あなたを怒らせるために」という目的節を導く願望の接続詞 lai を用いる。目的節では接続法を用いる。主節の主語と目的節の主語が一致する場合、目的節では主語を示さない。

3. 連体修飾

20. 私が昨日買った本はどこ(にある)? [内の関係の連体修飾節・目的語]

Kur ir grāmata, ko es nopirku vakar?
where be.PRS.3 book.NOM REL.ACC I.NOM buy.PST.1.SG yesterday

「本」を先行詞とした関係代名詞を用いる。

21. その本を持って来た人は誰(か)? [内の関係の連体修飾節・主語]

Kas atnesa to grāmatu?
who.NOM bring.PST.3 that.ACC book.ACC
Kas bija cilvēks, kas atnesa to grāmatu?
who.NOM be.PST.3 man.NOM REL.NOM bring.PST.3 that.ACC book.ACC

疑問詞 kas「誰」を用いるのが一般的である。または先行詞 cilvēks「人」と関係代名詞を用いる。

22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]

Šī ir istaba, kur mēs strādājam.
this.NOM be.PRS.3 room.NOM where we.NOM work.PRS.1.PL

先行詞 *istaba* 「部屋」と場所を示す関係副詞 *kur* 「そこで」を用いる。

23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]

Es jau izmetu to krēslu,
I.NOM already throw.away.PST.1.SG that.ACC chair.ACC
kuram bija viena salauzta kājiņa.
REL.DAT be.PST.3 one.NOM break.PST.PASSP foot.NOM

関係代名詞 *kurš* を用いる。関係節では *kājiņa* 「足」が主語で、「足」の所有者である椅子を先行詞とする。関係代名詞は与格で示される。

24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]

Es dzirdu, kā klauvē pie durvīm.
I.NOM hear.PRS.1.SG CONJN knock.PRS.3 at doors.DAT
Es dzirdu klauvējam pie durvīm.
I.NOM hear.PRS.1.SG knock.INDP at doors.DAT

聴覚動詞の補文節を導く接続詞 *kā* を用い、無主語で人一般を示し、動詞は 3 人称現在形を用いる。28 や 29 のように視覚・知覚対象となる動作を *-am/-ām* (再帰動詞では *-amies/-āmies*) で終わる不変化分詞 (indeclinable participle : INDP) で示すこともできる。不変化分詞については 28 で詳細を説明する。

25. あの人が結婚したという噂は本当 (か) ? [外の関係の連体修飾節]

Vai baumas, ka tas cilvēks apprecējās, ir patiesas?
Q gossip.NOM CONJN that.NOM man.NOM get.married.PST.3 be.PRS.3 true.NOM

名詞 *baumas* 「噂」の修飾節を導く接続詞 *ka* を用いる。

26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]

Es ēdu, kad atnāca tas cilvēks.
I.NOM eat.PST.1.SG CONJN come.PST.3.SG that.NOM man.NOM

時間節を導く接続詞 *kad* を用いる。

27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]

Es aizgāju uz vietu, kur gaidīja tas cilvēks.
I.NOM go.PST.1.SG to place.ACC where wait.PST.3.SG that.NOM man.NOM

場所節を導く関係副詞 *kur* を用いる。

28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]

Es redzēju, kā skrēja tas cilvēks.
I.NOM see.PST.1.SG how run.PST.3 that.NOM man.NOM
Es redzēju to cilvēku skrienam/skrienot.
I.NOM see.PST.1.SG that.ACC man.ACC run.INDP

視覚動詞の補文節を導く接続詞 *kā* を用いるか、視覚対象を対格補語として、その行為を示す不変化分詞「…しているのを」を用いる。動詞 *skriet* 「走る」の不変化分詞は *skrienam* または *skrienot* である。不変化分詞には 2 種類の語尾がある。*-am/-ām* (再帰動詞では *-amies/-āmies*) で終わる不変化分詞は、動詞の

一人称複数現在形と同形で、視覚動詞・聴覚動詞などの知覚動詞の目的語が主体となって行う動作をもっぱら示す。それに対して-ot（再帰動詞では-oties）で終わる不変化分詞は、-am/-ām（再帰動詞では-amies/-āmies）で終わる不変化分詞と同じく、知覚動詞の目的語が主体となって行う動作のほか、補文節で主体が行う付帯状況を示すため、使用範囲はより広い。例えば、Es lasu grāmatu, klausoties radio. 「ラジオを聴きながら、私は本を読む」では、動詞 klausīties 「聴く（再帰動詞）」の-ot(ies)で終わる不変化分詞 klausoties が用いられている。28.や29.のように知覚動詞の目的語が主体となって行う動作を示す場合、2つの不変化分詞には意味上の使い分けはない。ただし24.のように「ドアを叩く」主体が明示されない場合は、-ot（再帰動詞では-oties）ではなく-am/-ām（再帰動詞では-amies/-āmies）で終わる不変化分詞を用いる。

29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]

Vakar vakarā es dzirdēju, kā viņi sarunājās.
 yesterday night.LOC I.NOM hear.PST.1.SG how they.NOM talk.PST.3
 Vakar vakarā es dzirdēju viņus sarunājamies/sarunājoties.
 yesterday night.LOC I.NOM hear.PST.1.SG they.ACC talk.INDP

28と同様に、聴覚動詞の補文節を導く接続詞 kā を用いるか、聴覚対象を対格補語としてその行為を不変化分詞で示す。動詞 sarunāties 「しゃべる」の不変化分詞 sarunājamies または sarunājoties を用いる。

30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]

Es zinu, ka tas cilvēks vakar atnāca šurp.
 I.NOM know.PRS.1.SG CONJN that.NOM man.NOM yesterday come.PST.3 here
 補文節を導く接続詞 ka を用いる。

31. (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。 / (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話 / 間接話法]

Viņš teica: “Es šodien biju šeit”.
 he.NOM say.PST.3 I.NOM today be.PST.1.SG here
 Viņš teica, ka vakar bija šeit.
 he.NOM say.PST.3 CONJN yesterday be.PST.3 here
 間接話法では補文節を導く接続詞 ka を用いる。

32. 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主主]

Es apēdu ābolu, kas atradās uz šķīvja.
 I.NOM eat.PST.1.SG apple.ACC REL.NOM be.located.PST.3 on dish.GEN
 リンゴを先行詞とした関係代名詞を用いる。

33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

Es pieķēru kaķi ieejam/ieejot mājā.
 I.NOM catch.PST.1.SG cat.ACC enter.INDP house.LOC
 Es pieķēru kaķi, kas iegāja mājā.
 I.NOM catch.PST.1.SG cat.ACC REL.NOM enter.PST.3 house.LOC

「捕まえる」は視覚・聴覚動詞ではないが、視覚・聴覚動詞と同様に、対象が行う動作を示す不変化分

詞 *ieejam* または *ieejot* 「入るのを, 入ったのを」を用いることができる。または, *ネコ* を先行詞とした関係代名詞を用いる。

略語リスト

1	1 人称	LOC	位格
2	2 人称	NEG	否定
3	3 人称	NOM	主格
ACC	対格	PASSP	受動分詞
COM	比較級	PL	複数
CONJN	接続詞	PRS	現在
DAT	与格	PST	過去
DEF	定性	Q	疑問マーカー
FUT	未来	REL	関係代名詞
GEN	属格	SBJV	接続法 (願望法)
IMP	命令法	SG	単数
INDP	不変化分詞	SUPER	最上級
INF	不定形		

執筆者連絡先: dhorig@iwate-u.ac.jp

原稿受理: 2019 年 5 月 2 日